

教会の創立 79 周年を迎えて、神様の祝福がますます注がれることを祈ります。

教会形成 5 ヶ年計画、いよいよ最終年のテーマは「教会への奉仕と伝道」です。ここまで開心、静聴、充滿、献身を体験してきました。昨年は伝道師も迎えて、共に 1 年間主に仕えました。五年間のスモールステップを積み重ねて、教会は力強くなりました。受洗者、転入会者も与えられ、80 周年に向けて、尊い献金が捧げられています。教会のビジョンを練っています。さらなる恵みを期待して祈ります。

はるかに良くしてくださる

このみ言葉は、東日本大震災で被災した方々、神の約束の言葉として与えられた聖句でした。それは「神様はあなたを（試練の前より）はるかに良くしてくださる」というビジョンでした。人生の深い淵の底にいたサマリヤの女が、イエス様によって救い出され、命の水を得たというエピソードと同じです。

復興教会は、「リバイバル」の教会です。ブームが去った商品、たとえば、誰も良いイメージは持ちません。しかし、そこからまた再び、神様という方が「私がいいたい」と指名される、奇跡のストーリーが始まります。傷つき、打ちひしがれた状態であっても、神様の約束は、その前の状態より良いものにするという祝福です。

イエス様の眼差しは、いつでも父なる神様を仰いでいました。天国のビジョンから見える、収穫とは、悩みや苦しみの中にいる人々に、喜びと癒しと救いが訪れることでした。その復活の輝きがあるから、十字架の死という苦き盃も受けられたのです。

神の国を建て上げる

インド短期宣教で、アンカンヒ先生が、山上の変貌の箇所を引用して、神の御心とは、人間同士が比べ合う、成果や功勞の次元ではないとはっきり語られました。

全世界を、天国の喜びと賛美で包むことを実現させるためには、命懸けの覚悟で従うことが必要だと、力強く迫られました。改めて自分勝手に想定していた「神様の御心」の小ささを打ち砕かれました。

私たちの奉仕は、この平和の作り手、ピースメーカーとして、仕えるということなのです。マザー・テレサは「大きなことをする必要はありません。小さなことに大きな愛を込めればいいのです」と言いました。しかし、マザーのしたことはどれほど大きかったことでしょうか。マケドニアの少女の献身は、ピースメーカーとして用いられました。それでもなお、インドは今も貧しさと苦しみにあえぐ人々で満ちています。これが、神様のスケール、私たちに託された使命の大きさです。

私たちは、己の小ささを言い訳にはできませんが、神様のピースメーカーとして用いられることは、イエス様の満足した「弟子たちの知らない食べ物」で満たされる特権です。神の国の平和をもたらすために、私たちは奉仕に召されているのです。